西粟倉村　「ローカルベンチャーの取り組み」　　禰占通男

合併しなかった事により、行政運営を維持するために当時の人口を維持するとの考えから、2008年「百年の森林構想」の発想を、2017年は「生きるを楽しむ」をキャッチコピーにし、社会資本の充実に向けて一人一人の人生にフォーカスした取り組みへと広げている。

2058年までに地域の人々が役割を担い、楽しみながら生きることのできる「百年の森」実現の目標を掲げ、2019年「SDGs未来都市」に認定される。地域の資産を活かし、林業の6次化による環境を通じて、事業者間に好影響を与えローカルベンチャーの増加がSDGsの3要素の相互関係を強化して、2021年、ローカルベンチャーで働く人311人、2020年の転入者49人、2021年9月時点で46事業体・75事業、男女比女性17人、男性29人（共同代表あり）で進行中。

事業体の半数以上が女性で理に適う。

ローカルベンチャーの考え方は、現在の資産価値の少ない材料に付加価値を付けることで、域内での地産地消を目指す事としており、小規模水力発電、バイオマスエネルギーを可能な限り利活用していることである。学ぶことは多い。

ベンチャーへのエントリーに対しては、厳格な審査で、財政的な支援はないとの事であり、審査は、中国銀行をトップに各銀行の支店長の担当になっているとの事である。銀行は地方創生に当初からの関わりを持っての事と思うが、ローカルベンチャー宣言による全国広域連携ネットワーク・協議会があり、それに沿っての活動推進、一村での取り組みではなかった。

本市が取り組むには、現況化では難しい、担当部署の視察が必要。

奈義町　「子育て支援」

奈義町（R4の人口5.768人）の子育て予算の一般財源分は、予算の4%～5%で、今年度予算は1億8千万円であり、令和3年度歳出合計51億1千万円の4%は2億円、人口からして本市の予算歳出令和4年度150億4千万円の4%は6億円、子供予算の一般財源分は4億5千万程度と遜色はないが、本市はバラマキ的か。

行政は経済支援になりがちであるが、「子育て支援は経済的支援ではない」と断言している。

「少子化については、原因と現況を認識することが必要であり、認識した時点で手遅れになる。しかし取り組む必然性はあり、早急に思い切った策を取るべき」これは私の考え。

奈義町の現在の施策で全国に名を馳せて居るのは、奈義町存続の為「人口減少」は最大の課題としてとらえ「子育て宣言」に依り子育ての安心感、預けて仕事が出来る環境（今の世相に）町民の理解と支持を得ている。

余談ではあるが、職員の「定森」氏の母親は枕崎市の出身との事で、来訪を歓迎していただいた。